

Title	ワラント債市場の現状と問題点
Sub Title	
Author	小室雅美(Komuro, Masayoshi) 太田康信
Publisher	慶應義塾大学大学院経営管理研究科
Publication year	1989
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	修士学位論文. 1989年度経営学 第686号 複写許諾が必要
Genre	Thesis or Dissertation
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00001989-0686

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ワラント債市場の現状と問題点

ワラント債（新株引受権付社債）は、時価発行増資・転換社債に続き、第三の資金調達手段として成長・拡大している。ワラント債による資金調達は、企業の資金調達の多様化を促進し、現代的な財務戦略を構築するうえで望ましいことといえる。しかし、我国でワラント債の発行が認められるようになったのは昭和56年からで、未だ10年しか経過しておらず、成長・拡大したのもほんの3・4年前からである。ワラント債自体歴史が浅く、制度よりも実務が先行し、理論的体系も確立していないのが現状である。ワラント債の健全な成長発展を育成し国民経済に貢献することを期待するならば、現状を正確に把握し、上記の特徴より派生する問題点を認識し、その改善の方向を検討することが必要である。

この論文は、ワラント市場で発行市場と流通市場が切断されているとの認識にたっている。これを検証するにあたりそれぞれの市場で成立する価格を導出する。そのうえで両市場を連結する理論価格をオプションの手法を用いて算出し、この理論価格と両市場価格との3価格の間で乖離が何故発生するかを解明した。

分析の結果、オプションの手法を用いた理論価格が、過去の株価動向から判断して、ワラントの妥当値に近いという心証を得た。発行市場での価格は、ワラントの発行条件が画一的であるために銘柄ごとの個別性が反映できないこと、表面金利だけではワラントを適正に反映できないこと等が原因で低い値が計算された。流通市場での価格は、ワラントの持つ商品特性や流通市場の未整備等の原因で低い値が計算された。加えて、投資家は、心理的な「投資期間」に基づいた価格を持っているのではないかという心証を得た。

最後に、現在利用されているワラント債といえども多様化する資金調達手段の一形態に過ぎず、絶えず経済の要請で変化するものである。本来ワラント債が活用されるべき場面を研究し、今後どのような方向にワラント債が進むのか展望を考察することで本論文を締め括っている。